



香川県教職員連盟機関誌  
発行所: 香川県教職員連盟  
発行者: 北村 顕吾

〒760-0004  
高松市西宝町2丁目4番60号  
香川県教育会館602号

TEL (087) 835-2721  
FAX (087) 835-2723

<http://www.kakyoren.com/>  
E-mail: info@kakyoren.com

毎月10日発行 定価1部50円  
(年間1,000円 送料とも)

会員の購読費は会費の中を含む



香教連は、結成四十五周年を迎えた、子供中心の教育を目指し、健全なる批判力を持つ、県内最大の教職員団体です。

# 第一回全日教連・専門部会開催



五月十二日(日)、全日教連専門部会が東京・都市センターホテルで開催された。北村顕吾香教連委員長代理(全日教連副委員長)長、山田那央子養護教諭部長(満濃南小)、安部忠明特別支援教育部長(牟礼北小)、安富慶幸幼児教育部長(円座幼稚園)の四名が参加した。



八つの各専門部会(○学校事務職員部(女性教職員部)○養護教職員部○高等学校部(私学を含む)○栄養教諭・学校栄養職員部○管理職員部○特別支援教育部○幼児教育部)では、令和元年度専門部活動方針の検討として、議案書の内容・活動計画等について話し合われた。

五月十三日(月)に行われた第二次中央要請行動では、香教連から北村顕吾委員長代理(全日教連副委員長)と安富慶幸幼児教育部長(全日教連幼児教育部長)が出席し、幼稚園やこども園の実態や現状を文部科学省内閣府に伝えた。

担当者からは教育公務員(教育専門職)としての身分確保を、今後さらさら検討し努めていくとの回答をいただき、定数改善や研修体制、養護教諭や栄養教諭、事務職員の配置等についても要望し、意見交換を行った。



# 内閣や国会、文科省を表敬訪問



四月九日(火)に、平井たくやIT・科学技術担当大臣、山本博司参議院議員をはじめ、国会議員の方々を北村顕吾香教連委員長代理(全日教連副委員長)と原井和彦香教連副委員長(全日教連事務局次長)が表敬訪問した。グラレコ(グラフィックレコーディング)を教育現場で実験的に取り入れる御提案を頂いたり、教職員の働き方改革や学校現場の現状、発達障がい児支援等で意見交換をした。

また、四月十五日(月)、芦立訓文部科学審議官をはじめ文部科学省の各担当の方を、北村顕吾香教連委員長代理(全日教連副委員長)と原井和彦香教連副委員長(全日教連事務局次長)が表敬訪問した。芦立訓文部科学審議官からは、教職員の働き方改革が、子供と教員が向き合う時間



間の確保につながるのと同時に、教育の質の向上や地域・家庭にも良い影響を及ぼすものになるよう進めていくことなどについてお話を伺うことができた。

今後、内閣や国会、文部科学省に対して全日教連を通じて学校現場の実情を伝え、教職員の働き方改革が具体的に実現していくよう、しっかりと要望・提言を行っていく。

## 温故知新

私は現場を二年間離れているが、私が現場で先輩方に御指導していただいたことについて紹介していきたい。今回は「学級づくり」においてである。次の三つのことを大切にすることを教わった。

一つ目は子どもとの接し方である。ある会社創設者の著書の中で「上司が部下を理解するのに約三カ月かかるが、部下は三日で上司を見抜く」と書かれてあった。学級担任と子どもの関係にも通用することではないかと思う。担任はクラス全員の子どもを理解するのに時間がかかるが、子どもたちは担任の器を見抜くのは遅くない。自分たちの言いなりになる先生か、信念を持っている先生かを見抜く感覚は、低学年ほど鋭いものである。子どもは成長という視点から、教員として指導すべきこと、集団で考えること、一人で考えることなどを整理し、毅然とした態度で接することが必要である。

二つ目は、子ども観の確認である。子どもは有能である。子どもは大人の態度を見抜くことができる。したがって、どんなに年齢の低い子どもに対しても人間としての誠意ある対応が必要である。大声で指示したり、命令したりしても子どもの心を動かすことはできないということを、いつも意識することが重要である。教員の発言がぶれるようでは信頼は得られない。その場しのぎの対応をすれば、見通しの甘さを見透かされる。子どもに迎合すれば不信感を抱かせる。子どもを責めれば、気持ちは離れる。教員自身が自分を開かなければ、子どもは本当の姿を見せない。子どもだからこそ、誠意を持って接することが大切である。

三つ目は、小さなことでも困ったことがあったら、周りの先生方に相談することが大切である。自分だけで解決しようとしなくていい。未経験のことは、どのように発展するか分からない。大きな問題に発展することになるかもしれない。早期発見、早期対応が原則である。そのためには自分の周りをオープンにしておくことが必要である。

私は今、専従として勤務しているが、子どもたちと接する教員の基本的な構えとして、一教員として生涯心がけて実行できるように努めていく。(顕)